科学研究費助成事業（科学研究費補助金）（基盤研究（Ｓ））中間評価

課題番号	20H05634	研究期間	令和２(2020)年度 ～令和６(2024)年度
研究課題名	王陵級巨大古墳の構造分析に関する文理融合型総合研究	研究代表者 （所属・職） （令和４年３月現在）	清家　章 （岡山大学・社会文化科学学域・教授）

【令和４(2022)年度　中間評価結果】

評価		評価基準
	A+	想定を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○	A	順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	A－	概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、 一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
	B	研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C	研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である

（研究の概要）

本研究は、ミュオンラジオグラフィという新手法と三次元精密計測を組み合わせた王陵級巨大古墳の非破壊的調査研究手法を確立し、それを駆使して吉備三大古墳の構造を解明しようとするものである。あわせて、考古学的分析と胎土分析を有機的に組み合わせた埴輪の研究も行い、吉備勢力とヤマト王権の相互関係の解明に寄与することを目指している。

（意見等）

新型コロナウイルス感染症対策による行動制限に柔軟に対応し、研究を進めている。研究のコアとなるミュオン検出器の開発も堅調に進んでおり、既に透視像を得るなど進展が見られる。ただし巨大古墳の構造解析のためのミュオンの仕様を決定するにはデータが不足しており、異なる形式や異なる立地環境の古墳についても調査を実施する必要がある。墳丘については最新の計測技術を用いることで従来の技術では把握できなかった形態を発見するなど、考古学分野において革新的な貢献をしている。研究費の使用も適切であり、社会環境の変化に即応した効果的な使用がなされている。

埴輪については自然科学的データの積み重ねから文理融合が一段と進んでいる一方で、生産地の特定には古墳出土の埴輪（消費地）の分析に加えて、これらの古墳と同時期の埴輪窯（生産地）の識別データを蓄積する必要がある。